
ジャンク・ダルク

上川 勲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャンク・ダルク

【Zコード】

Z2289B

【作者名】

上川 勲

【あらすじ】

ぼくとすることとなんとなく散歩することが趣味の少年、遠藤ルミナ。少年はある日、なんとなく散歩していたら謎の棺桶を発見する。その棺桶から出て来たのは、あの英雄として名高いジャンヌ・ダルクだった。天然ボケ気味のジャンヌに、変態丸出しの三十路おっさんことジャックマンに見た目が赤ん坊でジャンヌとジャックマンの兄であるジャン。そして振り回されつつもツッコミは宿命とばかりにする主人公ルミナ。パロディイチックなコメディノベル、始まります！ 現在休載中。

第1話 植木からひとりひこいつへ見せ?

「ふあ～あ……」

ベッドから起きて早々、僕はあくびを一つする。

ポカポカした気温。それが僕があくびをする原因だ。

ちなみにポカポカとした気温だけ季節は冬だよ。念のため言つとくけど。

冬なのにポカポカした気温なのは、なんだかんだいって温暖化が原因なんだろうか？ そこんとこ今はよくわかんないけど……。

……うーん。なにか忘れているような気が……。

あツ！ 思い出したツ！ 『えんどう遠藤ルミナ』紹介だったツ！

僕の名前は『遠藤ルミナ』。ルミナって、だいぶ変わった名前だよね。

それだから案外他人に名前をすぐに覚えてもらえるのが地味ながらうれしいことだったりするんだよね。

趣味はぼ～っとすることと、なんとなく散歩すること。

高校一年で成績は並よりやや上、運動神経もそれぐら。

うーん……。運動神経や成績はともかくとして、趣味がどう考えても高校生っぽくない気がするなあ～。改めてみると……。

「どういらじょつと」

ちょっとぴり年寄りっぽい言葉とともに僕はベッドから起き上がり壁にかけている時計を見てみる。

午前十時……。昨日寝たのが午後九時だから十三時間寝たことになるね。うーん、よく寝たなあ。寝すぎのよつな気もするけど……。僕はベッドから起き上がってからはパジャマから着替えたり、朝

『はんを食べたり、歯磨きをしたり……そんなことをやつているとあつという間に午前十一時になつていたり。

え？学校はどうしたつて？今日は土曜日だから学校はなしなんだ。

え？他の家族はつて？……あー、それはねえ。…………。

実は、僕の父さんも母さんも外国で仕事をしているからここには居ないんだよねえ。よつて僕はマンションで一人で生活をしているんだ。

あと、妹が一人いるけど僕とは通つている学校が違うし、なにより距離がすごく離れているので妹も僕と一緒に一人で生活をしているのだ。

収入源は、父さんと母さんが1ヶ月に一度銀行にお金を振り込んでくれてるので、それで生活をしているんだ。（ちなみに妹も同様だからこの際省かせてもらいます）

さて、僕はすぐ暇になつた。

暇になつたので早速僕の趣味の一つ、『なんとなく散歩』をすることにする。

なんとなく散歩とは、その名のとおりなんとなく散歩すること、つまりぶらつぶらつとくに目的もないまま散歩することなのですッ

！！

……うわあー、僕つてすつごい暇人だあー。

そして暇人の典型的な例と思われる僕は公園にやつてくる。

公園には基本的な遊具はすべて置いてあって、ちびっこたちの絶好の遊び場になれるはずなんだけど、どういうわけか子供の姿がない。

うーん……じつやあれだね。たぶん家の中でゲームでもしてい

るのでしょうな。

そしてその公園の入り口の反対側には林がある。

その林はよく秘密基地とかつくれたりするから、僕が小学生のころは結構友達とそれで遊び合つたりしたものだけねえ。最近は時代の移り変わりのせいか、ゲームで遊ぶ子供たちが増えた気がするよ。

……よ。」江は一、童心に戻つて林の中でも探索するか。

111

林の中を探索するべく奥に入り続けて約五分。僕はとある物が視界内に入ってきたので歩むのをやめている。
その視界内に入つてきているものとは……、ずばり

「か、
……棺桶？」

そうとしか僕には考えられない。

ただ、造りがなんだか非常に高級感あふれる……おそらく檜とかなんか高級な木材を使用している、四角の中に入れる人が一人入れそうな物体。

ま、まさか……死体遺棄！？大事件の予感！？？僕にあらぬ嫌疑
がかかりまくりそう！？？？そして僕は牢屋行き決定！？？？将
来真っ暗にい！？？？？？

落ち着け、ルミナ。中に人が入っているか、まだ確認していない

じゃないか。

自分にそう言い聞かせる僕だけど、僕の心臓はバツクンバツクン、まるで初恋の人に告白するときみたいに……つていうか僕まだ初恋の人すらいないからよくわかんないけどあッ！

とにかくそれっぽいのでその表現で勘弁してよッ、みなさんッ！少し震える手で僕は棺桶を開けてみる。

するとそこには、長い金髪を三つ編みにして、服装はなぜか鎧を着ている女性がいましたとさ。

めでたしめでたし。

「……つて、全然めでたくありませんてえええええッ！……！」

うわあああああッ！……僕はどうしたらいいんだッ！……！なんか西洋風の鎧を着た女性が棺桶の中で健やかに永眠していますよ！……マジでッ！……本気と書いてマジでッ！……

自分でも爽やか過ぎるくらいな混乱つぶりだよッ！……だいたい混乱しているのに爽やかって何なのヤッ！……

「うん……」

……なんかしゃべりましたか！？これって喜んで良いんですけどか！？ゾンビが復活したなんてオチだつたら一生無差別に人を恨みますよッ！？？？

……念のため僕は彼女の白磁のように透き通つた華奢な腕をとり、脈があるかどうか確かめる。

……。

……。

.....。

まつ。よかつたあ。生きてるよ。
生きてるのは良いとして.....。

「人の人じょう」.....

第1話 棺桶からいつかの記憶を見た? (後書き)

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。

(月1回)

ネット小説ランキングへ現代FTコミカル部門へ「ジャンク・ダルク」に投票です。

第2話 ジャンヌをさ、人の名前聞違えないで下さい

えへ、どうも遠藤ルミナです。

僕は今ですね、たいへんなことに巻き込まれた気がしてなりません。

公園の林の中で偶然見つけた謎の檜で造られた棺桶。そしてその棺桶の中になぜか鎧を着た三つ編みの金髪の女性が寝ていたのですよ、はい。

そんでそれからどうしたって?.....

さすがにほうつておくのもどうかな?って思つたからその人をちやんと僕のマンションまで運んできたよ。

運ぶときやたらと周囲の人の目が痛かつたけど.....

それにさあ、女性にこんなことひつてなんだけど.....すげに重かつたよ、本当に。

原因はたぶん鎧なんだろ?けどさあ。

まあそれで、とりあえずその女性は僕のベッドで寝かせているんだけど.....なんかミシミシヒヒヒヒ。女性じゃなくて僕のマイベッドが。

まああの鎧、見た目以上に重いから仕方ないとはいえ.....「まあぶつぶつぶれるなんて事は.....ないよねえ?.....うん。ないない。.....だれかないと言つてください。

「 ないよ」

「えー?」

.....い、今、なんか女性がしゃべったんですけどーーー。

しかも「ない」つて.....もしかしてさつき僕の「ベッドが鎧の重みで壊れないか否か」という質問に対しての答えなの!?

「……だからピエール……。ハンバーガーはペットの子犬のジョニーにやつたって言つたじゃない……」

「…………は？」

「もしかして……寝言？」
それにピエールとか誰？しかも子犬にハンバーガーとかやつていの！？ピクルスが確かハンバーガーに入ってるはずだからやつちやいけないとと思うんですけど。

なんかけつこうさつきの寝言の中にツツコミをするべき点がいくつもあつた気がするのは僕だけ？

「…………あ、間違えた。チルドレンジャーがジョニーをさらつてたんだつた。…………とするとハンバーガーは妹のカトリーヌが食べたんだよ、きっと」

チルドレンジャーってどなたですかあ！？しかもペットをさらつてるのかよ！！

いつたいこの人はどんな夢見てるんだか僕的にすこく気になるよ！！

「…………うーん…………」

「…………あ、寝言が治まつた。やれやれ、僕も休憩しようつと。何の休憩かつて？それはツツコミの休憩だよ。思ったより労力使うんだよねえ、ツツコミつて。

「…………うーん。こうして見るとこの人。歳は対して僕と変わらないのかもしれないなあ。

「…………身長はだいたい僕は百六十五センチほどだけど、この人はそれ以下のだいたい百六十センチくらいだし、容姿も若々しいし…………。ただ、鎧を着ているのはなぜ？」

そこを僕はこの女性が起きたときも第一に聞いたこと思つてゐるよ。

そんなとき、

「…………」

「…………？」

「…………」

小さな唸り声を上げてその人はゆつぐつと目を開ける。
蒼い蒼い、聰明な蒼い瞳だった。

その目と僕の目がぴつたりと合つた。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「きやああああああああああああああああああああああああ
停止。それは彼女も同じよつて目をまわして呆然として
いる。

そして、

あ
！――――――

バツチイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

乾いた弾けた音が、僕の部屋中に響いた。

「…………まあ、無事でよかつたよ

あれから僕はこの娘にしばらく頬をビシバシビシバシと、そりやあ格闘ゲムでいうんなら軽く五十ヒツトへりは出せてたよ、あれは。

おかげで僕の頬はパンパンに赤く痛々しく腫れ上がって、今は氷で冷やしているんだ。

女の子も僕をさんざんひっぱたいてから正氣に戻つて、今は自分の行いに反省しているんだろうか、やや僕に顔をうつ伏せたままベッドに腰掛けている。

……まあ、ベッドがミシミシこつてこるのはこの際目をつぶるつ、うん。

「……あ、あの～。大丈夫ですか？お顔は。私がしてなんですけど……」

「え？あ～…うん。大丈夫。こつ見えて打たれ強いから」

でも顔をひっぱたかれたのは初めてだつたなあ～。初体験の痛みに、僕はけつこう堪えていたりする。

「それよつさ。一つ君に聞きたいことがあるんだけど」「なんですか？」

おおッ、素直に受け答えしてくれそう。よかつたあ～。

「何で鎧姿なの？」

「それは……戦争をしていたからです」

「へえ～……」

へえ～、そつかあ～。戦争かあ～。

銃弾が入り交じつて、騎馬隊が敵陣に特攻して、血しづきと敵味

方の断末魔が飛びかう戦争かあ～……。

……つて、はい？

「あ、……あの戦争つて？」

「……？ 戦争は戦争ですけど」

いや、そんなさも当然そうな顔で言われてもさあ。戦争なんて僕に言われても……。しかもこの『^{じせい}時世』に鎧を着ての戦争なんてあるの？

「……質問するけど、君の名前は？」

「私ですか？ 私はジャンヌ・ダルクとあります。ジャンヌと呼んでください」

ジ、ジャンヌ・ダルクだつてえ！？

あのオルレアンの乙女といわれて、フランスの国民的英雄でカトリック教会の聖女の！？？

いやいやいや、落ち着け自分ッ！！

たまたま同姓同名なだけかもしれないじゃないか。

そうだ。この世界中を探せばジャンヌ・ダルクという名前が十人に七人いるつて隣の山田君が言つてた気がするし。そもそも僕の隣の家にも学校の隣の席にも友達にも山田なんて姓の人いなきゃ。

「……あ、あの～。出身国は？」
「フランスですよ」

ああ、一致した。

……あ、今思えばこの女の子が寝言で言つてたピエールとかカトリヌつて、ジャンヌ・ダルクの兄と妹だったような……。
他には確か……ジャックマンとジャンつていう兄がいて……それ

くらこしか知らないけど。

「どうしましたか?.....えへっと、確か.....ベンジャミンさん」
「いやいやいやッ!...僕はベンジャミンって名前じゃありませんか
らッ!...そもそも僕はまだ君に名乗つてないからシ...」
「あれ? そうでしたっけ?」

「わつですよッ!...」

ふう~、危ない危ない。

危うく僕の名前がこの人の中でベンジャミンになってしまつとい
うだったよ。

そもそもどこからそんな発想が出てくるんだね。
この人つてもしかしてボケキャラ?...
まあとつあえず自己紹介しなきゃ.....。

「 僕は遠藤ルミナ。決してベンジャミンじゃないからね。ここ
重要ッ!」

念のため僕は強調する。

「はい。わかりました、ベンジャミンさん」
「はい。全然わかつてないよね、ジャンヌ」
「はい。全然わかつてます」
「はい。全然わかつてないといいなさい」
「はい。全然わかつてません」

.....。

少し腹が立つたので僕はジャンヌの頭をボコッと殴る。
ジャンヌはなんかすごく痛そうに自分の頭をさすっている。
まあそれは当然だと思つ。だって痛いように殴つたんだから。

僕は実のところ男でも女でも容赦しない主義だからね。
それで、僕は再度ジャンヌに聞いてみる。

「僕の名前は？」

「ベン……モードルリナセ」とです

よかつたかつたあ。

まだ少しベンジャミンヒーべーべーになつてたけどそれはおいて
いづ、うん。

まあそんなことより、

「……ジャンヌって、フランスから来たんだよね？」

「はー。そうですけど」

「……どうやつてきたの？」

「タイムマシンですか」

…………「ほん。

なにかさつや、ものすいへへチックな単語が出てきた気が……。

「タ、タイムマシンって？」

「ルミナさんが私を見つけたといふにあつたのは桶桶だけですけど」

見つけたところにあつたって……あつたのは桶桶だけですけど。
もしかして……もしかして……

「もしかしてわあ。そのタイムマシンって桶桶型じゃない？」

「はー。そうですよ

やつぱつそつかッ……つてこつかデザインもひとマシなのなかつ
たのかよシ……

棺桶つていいイメージ ジなれ過ぎだぞッ――

「なんてそんなタイムマシンに乗つてきたの？」

「さあ？それは私も知りません。ただ、私の最後の記憶では戦場でうつかり居眠りしていたらいつの間にか乗つていてこの時代まで来たのですが……」

それつてつまり死んだとみなされたからじゃないんですかあ！？
そして本物の棺桶と間違つてあの棺桶型のタイムマシンで現世にやつてきたんじゃあ……。

「でもおかしいですねえ。あのタイムマシンつて確かまだ未完成だつてジヤンがいつてたはずなのに……」

「……ねえ。どのへんが未完成なの？」

「たしか……性格がどうのこうのとかいつてたような……」

「性格つて……もしかして性格が変わるとか？」

「はい。……でも、私の性格は全然変わつてないみたいでけどね。つまりは無事に別の時代にやつて来れたといつわけですね」

「へえ～」

まあ、それはそれでよかつたといえばよかつたんだけど……。
心なしか、さつきからベッドのミシミシ音が酷くなつてこるよう
な……。

「……ルミナさん。先ほどから聞こえている変な音は何なのですか
？」

ジャンヌもなんか気づいてる。……つてことは気のせいじゃない。
…………。

バキッ

ГЛАВА VI

僕とジャンヌの声が重なった。
なぜかって？それはさつきからずっとシニツでいたマイベッドがじに臨終になつたからです。

あ
た
れ
し
そ
ニ
に

「……あら? 薪が真っ一二になりましたね」
まき

薪ですって！？僕のベッドを薪呼ばわりですか！？？

……ふう。思わずキャラが変わっちゃってたよ。ショック過ぎて

10

「……ジャンヌ。一つ聞きたいことがあるんだけどさ。住む場所とある?」

僕はそんな質問をジャンヌにしてみる。

全部を全部信じられるわけではないけど、この娘はたぶん今のところ住む場所はないだろうと思つたからだ。

まあこれで「ありません」とかいつてきたり「じゅあじばりく」
こにいといいよ」みたいにいつてもいいかなあ、とか思つてたわ
けだけど……

「ちやんとありますよ。これからあなたの家に強制的に住ませてもうらこますので」

……なんだか。ものすごくここへ来てやったくな
った。

「それではじめへいの間、よひこへお願いしますね。ルミナセス

……はあ～。なんかすでに勝手に決め込んでる……。

これから僕はいつもなるんでしようがねえ。す、ぐ不_大だよ。

第2話 ジャンヌをと、人の名前間違えないで下さい（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。

（月1回）

ネット小説ランキングへ現代FTコミカル部門へ「ジャンク・ダルク」に投票です。

第3話 グッバイ、僕のベッド。ジャンヌ曰く薪よ

「起きてください。ルミナさん」

「うー。なんだ。なんか僕の耳に女性の声が聞こえる気がするよ……。

なんだか清らかで、聰明な感じの……。美声って、僕の耳に入つてきていること、これが嘘のことこつのかな?

「起きてください。ルミナさん」

「うー。でも……なんだ……。

僕は「うー」で眠たいんだつて。おまけに今の季節は冬だからなおさらだよ……。

あつたかいふかふかの布団にずっと包まつときたいつて、ホントうー。

「起きてくださいよ、ルミナさん」

「うー。ホントに寝かせてくれ……。

眠いんだからさあ……。

「朝ですよ~」

「……朝だね。少なくとも、夜じゃないよね」

「やつですよ~」

「朝は寝る時間帯だから僕は寝るよ……」

「起きる時間帯の間違いですよ、それ」

「……」

……あ～。適当に声をあしらおうとしたんだけじゃ無理みたい。

……アレ?

なんか僕、ナチュラルに会話してたけど……誰と話してるんだろ?
僕は一人暮らしをしてるし、妹が時々勝手に合鍵で僕の部屋に入
つてくるけど、どう考へてもわざと聞きえている声は妹の声じ
やないし……。

気になつたので僕は重いまぶたをゆっくりと開ける。

「あ、起きましたね。ルミナさん」

金髪の長い髪を二つ編みにしている女の子が、僕の顔を覗き込んでいた。

「どうしたんですか? キヨトンとしていますけど」
「…………誰?」

僕のそんな声を聞くと、なんだかその女の子はガガガガガアアア
アンツ!-! みたいな表情に早代わり。

いやあ～、だつて知らないし。それに眠たくてなんか脳みそがう
まく機能してないからなあ～。

「覚えてないんですか? ルミナさん。ジャンヌです。ジャンヌ・ダ
ルクです」

「へ? ……ジャンク・ダルク?」

「違いますッ!-! 私は決してぐずやがらくたではありませんッ!-!
……今のどじねね」

今のどじねー? ってことはこつか壊れてぐずやがらくたになるつ
てことですか!-?

思わず僕は上半身をベッド……ってあれ?ベッドじゃないし。
なんか普通に床に布団が敷かれてるんですけど……。

……あ。なんか思い出せそう。

何を思い出すって?そりゃあ僕の隣で僕をまじまじと動物園にいる動物を見ているような視線で見ているジャンク・ダルクのことだよ。

あれ?ジャンクソン・ダルマだっけ?……まあいいや。
とにかく僕は考える。

……。

……。

……あツ! そつだツ! 思い出したツ! -!

「君の名前はたしか……カラス天狗ツ! -!」

「ジャンヌ・ダルクですツ! -!」

「……あれ? そつだっけ?」

「そつですよ。さつきも言つた気がしますけど

うーん。少し惜しかつたなあ。

カラス天狗とジャンヌ・ダルク。……うーん。惜しいね。気分的

に。

「全然惜しくないですよね。ルミナさん」

「そうかな? 僕はけつこういい線ついたとおも……」「めん。僕が悪かつたよ」

なんかジャンヌの表情がどんどん鬼の形相へと変貌しかけていたので僕はとにかく誤る。

……つていうか、なんかせつとき心の中をよみれたのは気のせいかな?

「全くもって氣のせいでですよ。ルミナさん」

「……」

「うん。

全くもって氣のせいでじゃないみたいだ。まあそれは今はおいたい

「……ベッド。直さないといけないな」

僕は真ん中から真っ二つに割れたベッドをみてそんなことを呟つ。だつて、これがないとなんか落ち着かないというか……。

「へえー。ベッドっていうんですか。それ」「うん。決して薪じゃないから。これ重要ッ……って、ジャンヌ。君つてベッドの存在知らなかつたの?」

「はい」

「うん……。これはけつこう何も知らなさそうだぞ。

まあ無理もないかもしないけどさ。ジャンヌが生きてた時代にそもそもベッドなんかがあったかどうか定かじやないし、ましてやテレビとかなんて知つてゐわけないよね。この感じじや……。

「あとにかぐ。」これからベッドを直すか

「どうやって直すんですか?」

「……」

「……。痛いところをつきなさるね、」のお嬢さんは。

実は何も考えちゃいないんだよねえ……。

つていうか壊したのはこの人なんだから直すのは僕じゃなくてこの人だる……。しかも薪呼ばわりするし。

「……」

僕は意を決して壊れたベッドを捨てる」とした。
だって大工用具ないし、そもそも修理のやり方なんて知らないし
勢い込んで言つただけだし……。

僕の部屋の隅っこがちょっとびりとびしくなりました。
おもわず体育座りで落ち込みたいくらいに……。

「随分きれいになりましたね、ルナナさん」

きれい……、その言葉にはちょっとばかり語弊があるのは僕の気のせいかな？

きれいじゃなくてむしろひしゃいましたよ。殺伐としますよ。

ただしさえ僕の部屋には何もないんだからベッドまで消えちゃつたら寂しさ全開だよ。真夜中の墓場までとまじわないけどさ。

……ん、墓場？

「……ジャンヌ。君の棺桶型タイムマシンは回収したの？」
「いえ。回収しませんけど。面倒臭いですし」

「ちょっと。まずいんじゃありません？」

棺桶を放置だよ？しかも人気のない林の中で。

何か事件が起きたと思われても不思議じゃないんじゃ……。いや、

この時代にジャンヌ・ダルクが来ていること事態、ノストラダムスもびっくりの大事件つぱりなんだけど。

しかもその棺桶はタイムマシンだよ？そんなオーバー・テクノロ

ジーなものが放置されてたらまず困るでしょ…

「ねえ。ジャンヌが乗ってきたタイムマシンって、起動するの?」

「 わあ。知りませんけど。でもおわりく50 - 0000000000
0000000000000000001パ セントの確率で動くと
思こますよ。」

微妙すぎるけど半分切つてるじゃないツ！！動く確率ツ！！

僕はすたすたと玄関まで無言で動く。

「棺桶を回収したいってくるよ。」
つていうかさあ、君も手伝え

「なんですか？」

……なんだね。ものかじへじこつをぶん殴つてやつたくなつて
きた。

「君の持ち物だろ。持ち主がちゃんと回収しないと」「ですけど、こんな明るい時間に取りにいくんですか？」

はッ！…そ、うだつたッ！

普通に落としたリュックとか拾いにいくのはまだしも、今回拾う
というか持ち運ぶのは棺桶。しかもタイムマシン。

毎晩おひるべと櫻桶を振ぐ自分。それを振りしめながら、彼女はまたまた笑う。

そして僕は変人扱い……。

「……」

僕は夜に回収することにした。
さすがに変人扱いされるのは嫌だし。

第3話 グッバイ、僕のベッド。ジャンヌ曰く薪よ（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。

（月1回）

ネット小説ランキングへ 現代FTコミカル部門へ 「ジャンク・ダルク」に投票です。

第4話 夜中に棺桶を担いで歩く人ついでに傍から見たらおかしいよね？

ふあー…。眠い…。

なんだかんだであれから夜になりました。しかも夜中の10時。普段の僕ならすでに寝てている時間帯。なのに…。

「どうしました？私の顔を見て」

「いや。別に…」

「この人のせいで寝ることができない。

うう……。夜風が寒い。羽毛布団が恋しそぎるよ。

今だけ。

今だけでいいから、「ココラやチンパンジ みたいに全身に毛が欲しい。人間は進化してる生き物っていうけど、本当にそうなのかなあってついついこの寒い中思つてしまつよ。

普通進化しててるのならさあ、もつといひ……毛を自由に生やしたり抜いたりできないものかなあ……。

人間が体毛を自由に伸び生やしたり抜き落としたりするとこう…。

……。

……。

……。

……。

「あれ？どうしたんですか、ルミナさん。急に顔色が悪くなつたよ」

「い、いやあ……。気のせいだよ気のせい」

ふう。思わず想像しちゃつたよ。

やつぱり人間は今ままが一番つてことかな。

「……ねえ、ジャンヌ」

「はい。なんでしょうか?」

「ジャンヌがタイムマシンで僕たちの時代に来ちゃってるわけだけ

ど、家族の人たちとか心配してるんじゃないの?」

「たしかに、『大変だ大変だ』みたいにはなっているとは思いますが、3日で問題なくなると思いますよ」

「いいのか? それで。

ジャンヌもなんかさも当たり前みたいに言ってるし……いいんだううね、うん。

「……さてと、これから運ぶわけだけど」

「なるべく人目につかないようにならないといけませんね」

「うん」

幸い、誰も棺桶には気づいていなかつたようで大事件になつてゐる様子はないし、ちやんともとのまんまで残つてゐる。いやあ、よかつたよかつた。

そして、僕とジャンヌが棺桶を2人で持ち上げようとする。

「……あれ? 棺桶つて、こんなに重たいものなの?」

「さ、さあ……? 私、棺桶なんて持つたことないんでわかりませんが」

なんか中に入つてるような重さ……。

「だけど、僕が一度開いて見たけどどう考へても人一人くらいしか入れない大きさだつたし……氣のせいだよね、うん。」
僕はそんなことを思いながらジャンヌと一緒に棺桶型タイムマシンを運ぶことにした。

うん。僕は一つ気づいたことがあるんだ。

それは……なんというか……、夜中に棺桶を運んでいる人程、怪しい人たちはいないってことに。

考えようによっては何が犯罪でもしてきたのか? 犯罪でもしてい
るのか? って感じに客観的に見えなくもない。

「おーッ！おまえたち何していろいろんだ！？」

つて思つていたところから出でちやつたよおおおおおシツ！

「あ、ああああああ～。えつとですね～
「タイムマシンを運んでたんですよ

! ! ! !

なんか警察官も「何言つてんだ、」
「いつ」みたいな顔でこちらを見
てるしッ！－！

「……話は署で闇いづ」

怖くてじつに顔つきで僕たちにじらじらと追いつく警察官。

ああ……もう、刑務所行きだああり

卷之三

《詩經》

なんだかとつても不気味で悪役的な含み笑いが聞こえ始める。

うわあ～。なんかとんでもないものを現世へ来させてしまったのでは?

『1つツ！ 鐙はすべて海パンにツ！！』
つていたあツ！！！

僕は驚いて抱いでいた棺桶を警察官目掛けて投げ捨てる。

たでアッサン声が耳元で聞こえてきてなんたよ、！！嫉妬でツッ！オッサンには悪いけどさあツッ！

しかもその棺桶に入っているオッサンと思われる人物は頭でもぶつけたのか先ほどから「う～う～」うなつてる。

「そ、その瓶は……ツーッ！」

「うおッ！？なんかジャンヌが自分は知つてます的な感じに言つて
るしつ！！

もしかしてジャンヌの知り合いッ！？知り合いにしても悪趣味な
……。

なんか「鎧はすべて海パンに」つとか叫んでいたし……。

『ふつふつふつふつふ……。久しふりだな、ジャンヌ。つと言つても
も一日しか経つてないけど』

警察官を下敷きにしている棺桶から、突然シユウウウウウウウ
……と、白い煙が噴き出してきたッ！！

「うわあ……。そんな機能あつたの？ 実に不必要的機能だなあ。
棺桶からのつそりと出てきた人物は、白髪のボサボサ頭で眼鏡を
かけ、白い白衣を着て……まあ、この辺はまだまだ許せる範囲。
けど。……だけどさあ。

なんで下は海パン一丁なのさッ！！

「やつぱりジャックマンじゃないですかッ！！」

「ふふふ、久しふりだな。ジャンヌよ」

なんか勇ましい戦士のような口調のジャックマンとかいう人。
勇ましいしゃべり方だけど……その格好じやなあ。ギャグとしか思
えないよ。

しかもジャンヌはジャックマンの海パン姿にはノータッチだし。
もしかして、いつもこんな格好してるのがなあ、この人。
ともかくにも、僕はなんだかとんでもない人に出会ってしまった
たのでした。

……だれか、僕と代わりませんか？

第4話 夜中に棺桶を担いで歩く人ってすっごく傍から見たらおかしいよね？

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。

（月1回）

ネット小説ランディング>現代FTコミカル部門>「ジャンク・ダルク」に投票です。

第5話 シチコレ ションハウゼンひまり大事だと思つよ

「 ルミナさん、起きてください。朝ですよ~」

「」

.....うう。朝、か。起きないといけないな。

眠たくて、頭が未だにぼ~っとしているナゾ、今日は平日。学校もあるので僕は起きることにする。

.....う~。寒ツ。ジャンヌ、僕より早く起きてるんだからストブつけといて欲しいよ。

いや、ダメだな、やつぱり。よくよく考えてみるとジャンヌはベッドの存在すら知らないんだからストブの存在も知らないんだろうなあ。

「~どうしました? ルミナさん」

「 いや.....。なんでもな 」

そういうかけたとき、僕の視界にあるものが入り込んでくる。棺桶。それも、ベッドがなくなつたところにひょいとビーン取つている。

はつきりこつて、嫌だなあ。不吉極まりないよ、まつたく.....。

.....あれ? そういえば、

「 ジャンヌ、あの.....なんだっけ? あれだよ。あれ。.....そう、ジャックマンって人はどこいったのさ?」

「 ジャックマン?ああ、兄さんのことですね。兄さんなり

そういうながらジャンヌはスタスターと棺桶のところまで移動して、棺桶をパカッと開ける。

そして、

「アラカルト」

1

僕は布団からいせいやながら出て、棺桶の中を覗いて見る。と、

「ハハあああああああああああああああああああああああああああああああ

?

「どうしたんですか？そんなに大声を出して…」

卷之三

だつてッ！！その棺桶の中にはおつさん、もといジャックマンがツ！！ジャックマンさんがなんか某毒リンゴを食べて眠つてしまつたお姫様チックに寝てるんだよツ？？

二丁ツ

おまけにおっさん……なんでターフにならんのやッ！！まるで思春期の子供が誰か異性のキスを心待ちにしてるようにならんのやッ！！！

寝言でおっさんが「ううう……キスして。キスしてえ」。別れる前にキスしてえ~「とか言つてるしち~!!

いろんな意味ですまぬ……マジで……

「兄さんは今まで30年生きてきて告白した回数1717回のうち
ふられた回数が1717回ですから、おわりく夢の中でも…」

1717回も告白する暇があるなんて……暇ですね、君のお兄ちゃんは。

思わずそんなことを僕は考へてしまつ。

「……あれ? ジャンヌは早起きなのに、この人はまだ起きないの?」

卷之三

100?

「今、
……
なんて？」

「兄さんは誰かにキスされるまで起きませんよ。絶対に」

えっと、それはつまり……。

「ルミナさん。お願ひしますね

「私は……ファストキスは好きな人とするって決めてますので」
「それは僕も同じだああああああツツ！！！」

「た、たいたい！！元どその妹がキスするなんて禁斷過ぎてこの小説サイトでは見せられないじゃありませんかッ！！健全な少年少女も見ていいかも知れないんですけどからッ！！もし兄と妹のキスシーンの描写が入つてしまつた日には、この小説がノクターンライトノベルのサイトに移行になつちゃいますよッ！！」

うわッ！小説のキャラクタ
がそんなことしゃべつていいいのかな
あ。

「いいんですよッ！－「メティなんですかからッ！－！」

意味わからないしつ！－つていうか心読まれたしつ！－

「ああ、ルミナさんッ！－レッジ』ですッ！－男と男のキスをツ！－」

「いやッ！－つていうか兄と妹のキスシングがアウトなら男と男のキスシングもアウトだろッ！－！」

「いんですよッ！－この作者のことですからなんとか誤魔化してくれるはずですッ！－理科の化学反応の一例とかでッ！－！」

ぜんつぜん例になつてないだろッ！－

「それとか『日本の伝統はモザイクです』とか言つてルミナさんが誤魔化して下せーッ！－」

無理だろッ！－絶対ッ！－

だいたいモザイクに伝統なんてないつてッ！－

「さあッ！－ルミナさんッ！－これから兄さんを起こす度にしないといけないんですからまずはその第一歩だと思つてして下せーッ！－」

「そんな第一歩は踏みたくないつてッ！－」

やつれりしてこのひじにびんびんびんびんジャンヌに背を押され
て僕とおっさんのがちび……いやいやいやッ！－こんな描写したら
ここで小説が打ち切られてしまつてッ！－

ああ……と、とにかくッ！－僕は最大すぎる貞操の危機がせまつ
てくる身で「やこまして……ッ！－ああ……ああ……ち、近づくッ

！…近づくッ！…近づいてくるつてええええええツッ！…！…！…
やめてえええええツッ！…！…もう止めてくれええええええ
えツッ！…！…

なんですかあツ！…僕は何か悪いことしましたかあツ！…？
連載始まつてから僕は何もまだたいして悪いことをしてない気が
するんですけどツ！…

ああツ！…来るツ！…来るつてえええええツッ！…！…！…

ブチュウウウウウウウウウウウ

…

日本の伝統はモザイクですツ！…

第5話 シチコレ ションハウゼンはやはり大事だと思ったよ（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。

（月1回）

ネット小説ランキングへ 現代FTコミカル部門へ「ジャンク・ダルク」に投票です。

第6話 小悪こじりむくへ逆さまに穿こひひつアレ

ふう〜。今日も暇な授業だつたな〜。

……あッ！そつそつッ！…！ただいま僕は学校から家に帰宅中なんだ。

え？学校での出来事はつて？それは〜……あれだよ。学校では特に話す内容といつものがなかつたんでカツトしたんだ。

う〜ん。我ながらなんて自分勝手さ。思わず自分に惚れ惚れしちやうよ。……誤解がないようにいつとくけど、「自分に惚れ惚れ」つて言つてたけど僕はナルシストじゃないから。ただ単にノリでいつただけだから。これ、重要ッ！（念のため「-」マークをつけとくから）

かわりばえしない帰宅道をひとつで歩いて、よくやく我が家に到着。そして鍵を開けて中に入ると、

「どうだッ！？ジャンヌよッ！…今の余は最高にセクスイーではないかッ！？？」

「兄さんッ！…」こんなところをルミナさんに見れたら盛じた濃縮還元100%ですよッ！…

「大丈夫だッ！…」この余のセクスイーっぽさで、朝余にモーニングキスしてくれたルミナ殿も許してくれてかつ、喜んでくれるはずだツ…！」

……。

僕は扉を開けて中の様子を見たまま動けません。フリーズ状態です。

いや、なんでつて聞かれても……困るよ、僕。

「おおッ…ルミナ殿ッ、帰ってきたのかッ！…どうだッ…！」

余のセクスイーっぽさは??セクスイー度数100だろ?」

今僕に話しかけてきたのはジャンヌの兄のジャックマン。僕がそいつに返す言葉は決まっていた。

「歩く変態」

……あ、なんか固まつた。

いやだつてさあ……海パンなら大まけにまけて許せる範囲かもしないけど……僕の目の前にいるこのおっさんはティーバックー丁なんですよ?

悲鳴を上げなかつた自分がすばらしそぎるよ。つていうかこんなおっさんをさつきまで相手にしてたのか?ジャンヌは案外苦労人なんだなあ、ジャンヌも。

「歩く変態などとは人聞きの悪いぞ、ルミナ殿。歩く芸術といつてもらおうか……へブウツ……」

面倒臭くなつたので僕はジャックマンのどつぱらを容赦なく殴りました、テヘ

だいたい何が歩く芸術さッ!!歩く変態だよッ!!わいせつ物陳列罪で逮捕だよ、この人ッ!!

あ〜…、なんかこの人が来てからやけに僕の暇でランボー……かはどうかはわからないけど、ともかく僕の日常生活がぶち壊しのような気がするよ。この人と比べるとジャンヌは幾分にもマシに思えてくるよ。いや、実際にマシだ。

「あ、あの~」

「大丈夫だつて。死にはしてないよ」

ジャンヌがティーバック一丁で倒れている変態おっさんを指差してあわあわしているので僕は適当にそんなことを言つ。

いやだつて、大丈夫でしょ？あれだけ変態にかつエネルギー・シユにあふれた人なんだからさあ。

「そうそうジャンヌ。僕ちょっと宿題やるから静かにしててね」「あ、はい。わかりました」

うん。本当に良く考えてみると普通、といつかまともだ。敬語口調だし。

夢態おひさんのはとにはども思えなほとたよ まへたく

「宿題ですと！？ルミナ殿」「うわあッ！－！」

いきなり目の前におっさんのドアップはやめてくれよッ！…って
いうかおっさんの髭がチクチクと痛いってッ！…そこまで接近する
意味がわからないしッ！

場合。

しかもいつの間にかティバックから海パンに着替えてるしッ！（念のためいつておくと上半身裸です）

「そ、そりだけど……何？」

「いや意味わかんないってッ！！妙な含み笑いしてないで要件早く
いつてよッ！」

「実はな、ルミナ殿。勉強を効率よくするためのマル秘アイテムを
余は持つてあるのだ」

「え！？」

おおッ！それってあれかなあ？

ドラ もんチックな科学的に解決できないほどのオーバーテクノロジックな道具を出したりするの?

ああ、おっさん。さっきまで変人扱いしてごめんよ。今も実はまご変人扱いしてやるサダメ。

「ふふふ。眞になつておねよつだな。よからへ、すべに見せしやう
うしー。」

期待に胸を膨らませる僕。

そしてシャツケマン（敬意を表しておひやんとエリエで呼ひません）は片手をそのまま海パンの中にさし込んだ。「えー？」

中で！？何の中に手を突っ込んだ！？海ハンッ！？
……おい、ちょっと。

ゴソゴソ

.....નુસ્તા

ゴソゴソ

「待てえええええええええええええええええええええええええええええええいッ！！！」

! !

なにこの人さりげなくしかも当たり前の日常動作のように海パン

の中に手を突いて込んでゐるわよ!!

やつぱりアンタ変態だよッ！－マジで変態だよッ！－永遠の変人だよッ！－

そして取り出したものは……

「黒鉛筆うへ（黒色）」

しかも普通じゃないかッ！（怒）

なにさッ！…せつかく人が期待してたのに庶民的な道具しか出で
こなかつたよッ！

なんか言い方がやたらとドラ もんチックだしッ！
しかも汚すぎて使う気にもならないし、触る気もしないつでッ！

「ああルミナ殿。これを使い……グホオッ！…」

無論このあと僕は、この変態ジャンヌの兄のみぞうちコストレー
トパンチを見舞いしましたとれ。
めでたしめでたし。

第6話 小糸こじねもへ逃れてもに穿いてねやつアレ（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。

（月1回）

ネット小説ランキングへ現代FTコミカル部門へ「ジャンク・ダルク」に投票です。

第7話 平穂はひょっとしたことで消えてなくなるものだよ、ハハハ…… その

それははある平日突然と起きてしまった……。

その日、僕こと遠藤ルミナは、いい加減飽き飽きしている中年のおっさんが運動不足を解消するにはもってこいの、家から学校までの道のりを猛スピードで自転車をこぎ、そして遅刻ギリギリの時間に学校にたどり着いていた。いつものことだから、僕はあまり気にしないけどね。

だけど僕は後々思うんだけど、ここまでだったのさ。『いつものこと』で終わらせることができたのはね。

「 よおルミナ。あいかわらず元気か~？」

教室に入るなり、僕にそう声をかけてくるのは小学校からの友人……それも腐れ縁となっている『後藤哲哉』。名前はいかにも哲学者っぽいのにアルコール度数20のワインを一気飲みしてベロンベロンによつぱらつているナマケモノより頭は悪い。名は体をちつともあらわしていない良い例がここにいる。

ついでに補足的に言うと、僕はこのこと名前で呼ぶことはしないね。代わりにここにペッタリのニシクネームで呼んであげている。

「元気、ねえ……。正直五分五分つてところだよ、エロ哲^{てつ}」

Hロ哲、それがここにニシクネームや。

読んで字の「」とく。Hロ + 名前の哲哉の哲。

現にこいつは中学三年のときまで女子のスカートをめくつて愉しかった正真正銘のテロリストならぬHロリスト。それでしょっちゅう特別指導を受けているにもかかわらずそのときはやり続けてい

たのだ。

さすがに高校に入つてからはやつていらないんだけど、何らかの禁断症状が出てやつてしまつ可能性がないとは言い切れないでの、腐れ縁ながら一応友人として心配している。ついでにナンパ癖もあるけど、こっちのほうは未だに治つていない。

正直止めてほしいとばかり僕は思つてゐる。恥ずかしいからね。

「なんでだ？」

「いや……。ここ最近変態おつさんを厳重に取り扱い続けているからさ」

「だれだ？そりや。俺の知らないおまえの友達か？」

友達……。微妙だね。

一般的にあのおつさんはお近づきになりたくない人間ナンバーワンに君臨するだろしね。極論を言つなら、ゴキブリとあのおつさんをどちらか選べと言われたら僕はゴキブリを選ぶ自信があるよ。極論だけど。

それに比べたらあのおつさんの妹は、あのおつさんと比べるのが失礼と思えるくらい良い娘だよ。天然でボケてるところがあるけど。アティトラン湖の水面で白鳥＆コニコーンと戯れている女神ヴァイナスと妹のほうを例えるならば、おつさんのほうは手賀沼で潜水で泳いでいるアメーバさ。

悪い人ではないんだけど、普段の姿が犯罪だからね。そう思つてしまつのも無理はないと悟つてほしいね。僕の心の声を聞いている誰か。

「それはそうと、ルミナ。知つてゐるか？」

「なにをさ？」

何かわからなかつたので僕は工口哲に聞いてみた。

「今日、いつのクラスに転校生がやつてくるんだよ」

「て、転校生？」

「初耳だ。と言つても僕はつこつけ教室に入つてきたわけだから知らないのも無理はないと思つ。」

「それにしてもこいつはどこからそんな情報を仕入れてくるんだろうか。」

「ずいぶんと急な転校だね」

「たしかに。噂によればその転校生、外国から来たらしいぜ」

「どこからそんな噂を仕入れてくるのさ。そしてどこでそんな噂を流している人物がいるのか教えてほしいよ。……そう言えれば、噂の発生源な人ほど「噂によると……」みたいなことを言つらじいけど。」

「H口哲はそんな僕にお構いなしに話を進める。」

「しかもその転校生、二人いるんだってよ」

「一人……。双子なんだろうか？」

「僕がそんなどうでもいいことをH口哲に訊こうとしたとき、教師が入つてきたので結局訊けなかつた。」

「それにしても一人も転校生がこんな中途半端な時期にやつてくるなんて……、まあ家庭の事情がなんかだろうね。」

「え？ 実はみんなにお知らせがある」

教師がそんなことを言つていた。そしてその後に續く言葉を、僕はなんとなく予測できているわけ。さつきのH口哲の会話のおかげで。

「実は転校生が、このクラスにやつてくることになつた」

その瞬間、「おおッ！」とか「マジッ！？」とか「誰かさつきオナラしただろ？」とか……若干関係ないものが含まれていたりもしたけど、そのような歓声が沸いた。

それを教師は「静肅にッ！」と、ここには裁判所かーとシッ ハリを入れたくなるような言葉を言つてクラスを静かにさせた。

「よし、入つてきなわー」

教師のそんな言葉とともにガラリと引き戸がスライドする。そしてその人物たちが教室に入つてくるなり僕は、

「…………」

…………と、「めん」「めん」つい我を忘れていたよ。

とにかく僕は驚いて言葉の一つ、「あ」の一文字一単語すらも発言できないほど驚愕して言葉が出せなかつた。

そしてそんな僕に気づかず、教師はその人物たちの名前を紹介した。

「紹介しよう。今日からこのクラスの一員となる、ジャンヌ・ダルクさんと、ジャックマン・ダルク君だ」

第7話 平穂はちよつとしたことで消えてなくなるものだよ、ハハハ…… その

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

ネット小説ランキシングへ現代FTコミカル部門へ「ジャンク・ダルク」に投票です。

第8話 平穏なひょっこりした」と洩れてなくなるものだよ、ハハハ…… その

「紹介しよう。今日からこのクラスの一員となる、ジャンヌ・ダルクさんと、ジャックマン・ダルク君だ」

「唚然……。 つていうか、何である二人が学校に！？」

「お金はどうしたの！？ 僕の銀行の口座から勝手に引っ張り出して学校にやつてきたわけじゃないよね？」

「僕以外の生徒のみなさんは「おおッ！ あの女子、かわいい！」とか「あの女子、帰国子女かなあ？」とか、ジャンヌのことをいろいろと話題にして騒いでいた。

……気のせいか、ジャンヌの隣にいるおっさんについては誰もがノータッチだ。気持ちはわからなくもないけどね。

すると教師が再び「静肅にッ！ 厳肅にッ！」とか言ってガヤガヤとつむさかつたクラス内を黙らせた。……ここは教師の台詞にツツ「ツツを入れるべきなのだろうか？」「ここは裁判所かよッ！」て。

「あの……ジ、ジャンヌ・ダルクです。みなさん、宜しくお願ひします」

「クラス内が再びうるさくなる。……主に男子だけど。

どこからおもなく「萌え ッ！」とか聞こえているのはたぶん幻聴だ。そしてそう叫んでいるのがあの工口哲なので、後でこの教室の窓から胸倉をひつつかんでそのまま捨ててやる必要があるかもしれない。……いや、是非そうするべきだね。

そして教師が再び礼の裁判所チックな台詞で教室内を黙らせた後、今度はあの変態おっさんの自己紹介である。

「はじめましてえ～ ボクチン～、ジャックマン・ダルクって言い

まあ～す 」

気持ち悪ッ！教室内の温度が一気に絶対零度にまで下がったような感覚を受けたよッ！！

しゃべり方がやけに乙女チックだし、裏声使いまくりだしつ！

「え～っとお、歳はあ～、十六歳でえ～っすう 」

嘘つくなッ！！

外見は明らかに三十路ッ！かつ～によく言うとM・S・Zエツ！歳もバリバリの三十歳でしじうがッ！ちなみにフられた回數千七百十七回ッ！面倒臭いなあ千七百十七回つてッ！1717のほうが見やすい気がするよ。

あとその気持ち悪い裏声で乙女チックなしゃべり方をやめえいッ

！！

「へえ～、そ～なんだな～」

「大人つぽいね～」

……てええええええッ！？

あつさり信じちゃつてるよ、クラスの皆様ッ！

大人つぽい、とかそういうレベルじゃなくて、もつとほかにツッ

「むべきところがあるでしじうがッ！

「え～っと、それとお～、趣味はあ～、お花畠でユニークーンと戯れる」とでえ～っす

バリバリ120%で嘘つくなつてッ、だから～！

ユニークーンなんてこんな都会の場所でヘドロが流れているようなドブしかない場所には住んでいないってッ！！

「ではみなさん。なかよくするよつ」

「「はあ～い」」

ええ

！？

いいの！？ホントにそれでいいの！？

なんだかツツ「むべきところがたくさんありますよツ！」
の僕としてはかなり辛いところがありますよツ！

ただでさえ巻き込まれ型人生歩みまくっているのに、このままじ
やあツツ「ミし損ねたボケが後々飽和して全世界が崩壊してしまつ
つてツ！？」

てなわけで昼食時、僕は真っ先にジャンヌとジャックマンの
襟首を引っつかんで、そのまま学校の屋上まで直行した。

後ろから「遠藤ツ！ひとりじめはするいぞツ！」とかいつの間に
か男子の中で即行で結成された「ジャンヌ様ファンクラブFC」のみなさんが叫
んでいたように思われたが、そんなこと気にしていられない。

「……それで、なんですかな？ルミナ殿。余たちをこんなところまで連れてきて」

その台詞を本気で言つてゐるのなら、僕はあなたを屋上から突き
落とさなければならぬんですけど……。

「ま、まあまあルミナさん、落ち着いてください。ルミナさんが聞
きたいことは『なぜ私たちが学校に来たか』てことですよね？」

僕は頷く。

「なんと、そうだったのですか？余はまったくわかりませんでしたぞ…………つと！？ルミナ殿！？いきなり余の胸倉をつかん、で……そ、そちらはフェンスがついておりませんが……まさか……何をするおつもりです！？」

「…………いや、バカは死ななきゃ直らなにっていうナゾ、その実験をしようと思つてさ」

「落ち着いてください」ルミナちゃんツ……兄の無礼は私が謝りま

すからあツ……！」

と、必死に哀願するジャンヌを見て、僕は仕方なしに、この変態三十路おつさんを屋上から突き落とすのを止めた。

「それで、なんで学校に来たのさ、一人とも」

僕が单刀直入に質問すると、

「そ、それは……」

とジャンヌは僕から視線を逸らしてジャックマンへとその視線は移動する。

……なるほど、読めた。

「…………あなたのせいか」

僕はギロリとジャックマンを睨む。
すると、

「だつてだつてえ～、余も学校とやらで行きたかったんだモンッ！」

……やめてくれ、そのダダッ子口調。おっさんがやると見た者の目の組織がアポトーシスを起こしそうからや。

単刀直入に言ひと氣持ち悪いからや。

「それはまあ一億五千万歩譲つたとして、入学金とかはどうしたのさ？」

「バクチで稼いだ」

「うつわあ～……。なんじゃ、そりや。つていうか、そのバクチの元のお金は誰もお金なのだうか？僕しかないよつな気がする……。

そう考えるとこのおつさんば、僕のお金を勝手にバクチに使って、そして儲かつた分のお金を使ってこいつして入学してきたわけか。ジヤンヌと一緒に。

「まあ、いいではないか。損はしないことだし、ここは大目に見てやつてはどうかね？」

「おまえが言つな」

はあ……、なんで？

何で僕の人生はこいつ……無茶苦茶なわけ？

ため息をつきたくなる、今日この頃の出来事でした。

第8話 平穂はちよつとしたことで消えてなくなるものだよ、ハハハ…… その

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

ネット小説ランキシングへ現代FTコミカル部門へ「ジャンク・ダルク」に投票です。

第9話 呪文って、暗示みたいなものなのかなあ～？と思つ今日この頃

ジャンヌたちがやつてきてそろそろ一ヶ月が経過したその日、僕はとにかく疲れていた。うん。そりゃあ～もう疲れていたんだ。

理由は変態おっさん（ジャックマン）がやたらと変態行動しまくるせいでね。おかげで僕が住んでこるマンションの七不思議にもなつちゃつたりしているんだ。

その内容が「真夜中の一時頃になるとティーバック一丁のおっさんがマンションを徘徊してこる」とかいうもので……そんな時間にあのおっさん何やってんだるうね、ホント。

それだけじゃなく、なんと最近になつてこのおっさん、僕が通つている学校にまで入学してきたんだ。

もうホント、勘弁してくださいさらない？

まあ転校してきたのがこのおっさんだけじゃなくて、ジャンヌもなんだけどね。

ジャンヌのほうは比較的普通、といつか真面目で、最近ではこの時代での生活になれてきたのか台所で僕の代わりに料理を作つてくれてたりする。それがまた美味しいから文句なしだよ。

それに比べてあのおっさんは……毎日毎日厄介な変態騒動を持ち込みやがつてッ！

ジャンヌがあんな良い子に育つたのもおそらくあれだ、反面教師とかいうやつだらうね、きっと。

その点では変態おっさんには感謝するべきかも知れないけど……。

……はあ。おっさんの今の性格がどうにかなつてくれたらなあ～。

「ただいま～」

「聞きましたゼッ！――ルミナ殿ッ！――」

「うわあッ！――」

扉を開けるや否や、ぼくの視界が三十路の男の顔で埋め尽くされたッ！っていうか登場が唐突過ぎるつーつー！

「……なにを聞いたの？ジャックマン」

一応訊いてみる。

「ルミナ殿が余の性格がどうにかなつてくれたらなあー、とこいつ」とをですぞ」

「……」

……なに？この人。

ジャンヌだけでなくこの変態おつさんにもテレパシ 能力ありですか？人の心読んで……。

「そんなルミナ殿にピッタリのビッグアイテムを手に入れましたぞツー！」

そう言いながら変態おつさん（あいかわらず上半身裸で海パン一丁。つていうか初登場時に着ていた白衣はどうこいつたんだ？）は自分の片手をズブリと海パンの中に突っ込む。……この変態めがッ。そして取り出したものは、

「プリ ユアステッキイー」

見た目がなんだか魔女っ子モノのステッキが出てきた。つていうか何？名前とはまったく関係なさそうな機能がついてそなんですけど、それ。……ていうかその名前、大丈夫？……まあ、伏せ字にしてるからいいけど。

「「」のステッキを使えば、対象となる人物の性格を変えることがで
きる超スグレ物のステッキですぞッ！」

「どうか近づけないでってッ！ そんなところから出したもの誰
が使うかッ！ 使うとしたら本人だけだつてッ！」

僕にやつされたとなにやら洗面所までいつて水を流す音が聞こ
え始める。 じつせり洗つているみたい。 まあ、いいけど。
やがて戻つてくる変態おっさんは僕にあのやたらとネームが長い
ステッキを僕に差し出してくる。

……まさか使えつてことなの？ そんな予感はしてたけどさ。

多少躊躇しながらも、僕がこの謎ステッキに手を触れて実際に使
わなければこの小説はここで終了してしまつので、物語の進行上、
僕はおそるおそるながらそのステッキを持った。

「おおッ！ 似合つてますぞッ！ ルミナ殿」

果たしてジャックマンの「」の台詞を聞いて、僕は喜んでいるべき
なのだろうか。

ちなみに先ほどの言葉は疑問系ではなく反語なので、そのこと
のクロシク。

シャラララーン、となんだか振ればラブリー・ファンタジックな星
がたくさん出てきそうなデザイン。

子供のおもちゃとしては百点満点をあげてもいいくらいだね。
しかし困つたことにこれはおもちゃじゃないらしい……ジャック

マのことを元に戻ると。

「……じゃ、ためしに一回だけ使ってみるか」

「うむ、せうしなされ

「」のこう意味不明で謎で未確認物体を扱うときには、かなりずテ

ストップレイをしなければならないのは、皆さんもわかつてもうえると思う。

だから、実験してみるとこしたとき、

「あツー・ルミナ殿ツ！合言葉は『ピーリカ・ピリカラ・チヨメリバ・コマネチ・ミックスジユース・マンモスウ』ですぞツ！…ちなみにちゃんと叫んでくださいですぞツ！」

……さて、僕はどうするべきか。

大体、そんな謎ワードを叫びたくはないってツ！ホントにツ！わかつてくれるよね？

「さあーどうしたのですか？ルミナ殿ツ！そんなことでは立派な魔法使いにはなれませんぞツ…！」

そもそも僕はそんなものになる気はないんですけどね。ハハハ…

……。

「そんな細かなことを気にしては将来宇宙親善大使にはなれませんぞツ…！」

そんな役職ができる前に、僕はとっくにこの世から姿を消していける可能性大ですけどね。人生八十年ですよ。

八十年の間に人類が宇宙で暮らせるまでの技術が発達するとは思えないしね。

「さあ、ルミナ殿ツ！とりあえずそのステッキをつか……」

「ピーリカ・ピリカラ・チヨメリバ・コマネチ・ミックスジユース・マンモスウツ…！…ドラ もんのび みたいに『メガネ、メガネ…』と叫びながらメガネを探すモノマネができるような性格になり

なさい」

物語を進ませるために、僕は合言葉を言って、自分でもわけのわからない言葉を適当に羅列して適当な性格を言いながらステッキを振るうと、なんだかステッキから『ミロリイーン』とか、なんだか「効果音にしても、もっといいものがあるはずだらうがッ！」とツツコミを心の中で入れつつも、ともかくそんな効果音とともにステッキの先からスーパー・オのファイヤー・ールみたく火炎弾が発射ッ！

そしてその火炎弾がそのままジャックマンに襲いかかり、ジャックマンはなぜか火あぶりの刑になつていた。

……ああ、なるほど。わけのわからない性格を僕が言ったから「そんな性格のほうがよほどマシだと思えるとは、キミはよほどこのおっさんに苦労してるんだね？ わかったわかった、皆まで言つたままで言つたま。我輩がこのおっさんを抹殺してやるッ！ 永遠にッ！」とステッキが勝手にそう解釈したからだらうね。……そういうことにしてもおじつよ。うん。

ちなみにその後、ジャックマンがどうなったのかは、誰も知らない。

第9話 呪文って、暗示みたいなものなのかなあ～？と思つ今日この頃（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

ネット小説ランキングへ現代FTコミカル部門へ「ジャンク・ダルク」に投票です。

第10話 間まきれて美術品とか盗むのが怪盗なのに、服が白基調なり皿立て

それは、僕が夕食の材料の買出しから帰ってきたときの「ことだつた。

「 てことで、余は探偵になるぞよシー！」

……みなさん、どうもすこません。唐突過ぎて……。

「 なにが、『 てことで』 なのさ? 」

いつたいどんな経緯があつて、そんな決意になつたのか、僕はそれが知りたい。ほら、僕の隣で正座しているジャンヌも困惑している様子だし。

するとジャックマンは、

「 ひょひょひょ……。余は気づいたのだ」「 なにを? 」

それと、どうでもいいけどなに? その笑い。いまどきそんな笑いする日とこなこと思ひナビ……。

「 悪を根絶やしきあるには、探偵になるしかないとシー！」

……うーん、ツツツむべきか、ツツツコまないべきか。そもそもツツツ「 なんでいいのかわからな」よつな内容に、僕は戸惑いが隠せない。このおっさんの考えることは唐突過ぎるために僕の頭の回転が追いつかない。フルで頭のギアを回転させていくけど今のところスリップして空回り気味……。

と、ついで僕の耳元でジャンヌが、

「実はルミナさんが夕食の材料を買いに行っている間、コンの再放送があつて、それに影響受けちゃったんですよ」

どうやらこの時代にやつてきたジャンヌたちはテレビの使い方を覚えてくれた様子……それでもつて、覚えた矢先からジャックマンが面倒」とをつぶらうとしているわけ、か。

……ふふふ、泣きたくなつてくるよ。

「……まあ、そう思つのは勝手だけど、せいぜい他人を巻き込まないでよ、ジャックマン」

「え~」

え~、とか言つなッ!! 巻き込む気満々だったのかよッ!! しかもその巻き込まれる人が僕とジャンヌである可能性が非常に高いッ!! とこいつかそうとしか思えないしつ!!

「だいたい事件とか、身近に起きているわけがないってツー起きてほしくもないしつ!!」

「え~。いやじゃいいやじゃいッ!! オイラ探偵になつて事件を解決したいんじゃいッ!!」

「気持ち悪いからやめいッ!!

「ジャンヌ、君からもこのおつさんになにか言つてよ」

「え? 私ですか?」

矢が飛んでくるとは思つていなかつたのか、ジャンヌは戸惑いながらも考える素振りをする。その間、駄々つ子おつさんはバタバタ

と手足をばたつかせてくる。近所迷惑だからやめてくれ。」ジーマン
シモンだし。

そして、ジャンヌが口に出した言葉は、

「……お願いします。ルミナさん」

「……」

「それってつまり……」「自分はお手上げです。あとはお任せします」って意味ですか？

「それでは私、ルミナさんの買つてきた材料で夕食作らないといけませんので」

と、そそくさとその場を退散して台所へ。

「えへへ、ジャンヌって台所の使い方も覚えたんだ。……まあ、いつも僕の近くで料理を作るところ見ていたからなあ……って、逃げたッ！？」逃げましたねッ、ジャンヌさん！—
仮にも兄妹きみうだいなんだからさあッ！—「ここは私にお任せください。喰い止めてみせます」チックなバトル漫画で味方を先へ行かせるような気の聞いた台詞を言つて僕に「わかった。」ここは君に任せる。死ぬなよ」くらに言わせてよッ！—

……嗚呼、どうしようつ。ここは僕もこの田の前で駄々つ子になつてこるおっちゃんから逃げて、夕食の準備の手伝いしようかなあ。

「オギヤ　スツ！—オギヤ　スツ！—」

とうとう座獣の赤ちゃんみたいな泣き声を上げる始末。……いかん、逃げちゃダメだ。このおっさんをこのまま野放しにしていたら、近所のみなさんの怒りを買つてしまつことになつてしまつ。

「オギヤ　スッ！　オギヤ　スッ！」

猛烈に逃げたいけど、オガタボイスで逃げちゃダメだ。
ダメだ。逃げちゃダメだ。
.....。

さてと、夕食の準備をしますか？

「ああも、うるせこつてッ…テレジでも見てなよ。事件なんてものは、フィクションの世界で起じるから面白そうに見えるんだって、実際に起きたら厄介なこと、この上ないものなんだから」

僕がそう言つと、ジャックマンは奇声を発するのをやめ、しぶしぶとテレビの電源をつけ、適当なチャンネルにして見始めた。……はじめっからこうしてけばよかつたなあ。

「……ジャンヌ、手伝つよ」

赤子を落ち着かせてから、僕は台所に行つて、夕食の手伝いをする。 ジャックマン

「はい。ありがとうございます」

柔らかな笑みを浮かべつつ、ジャンヌはそう言った。……よくできた妹さんだよね、まったく。先ほどまで超音波並の奇声を発していたジジのお姉さんの妹とは思えないよ。てへは反面教師としての役割をジャックマンはしているのか?一十四時間海パン一丁、上半身全裸、他人に迷惑かけ過ぎ、加えて千七百七十九円ビックりなあ、1717回女性に告白しているところからチャラチャラしている。……おおッ!—ダメ人間の塊じゃないかッ!—反面教師としての素質は十分だね、うん。

「……ジャックマンって、ずっとあんな感じなの?」

「あんな感じとはなんでしょう?」

「いや……単刀直入に聞くけど、あんなに変態だったの?」

「ホントに単刀直入ですね」

「下手に」まかしたら悪いこと思つて……」

「……」

なにか言いたげな視線を発していたけど、ジャンヌははあー、と息を吐くと、

「まあ、そうですね。基本的にあんな感じでした。……たゞ」

「けど?」

「頭はすくべ良いであります。HQ5000です」

…………ん?なにか幻聴が聞こえたような。

「HQ……が、どうだつて?」

「ですから、HQ5000なんですよ」

「誰が？」

「兄さんが」

僕は居間にいるジャックマンを見る。そこには三十路で、初登場時に着ていた白衣すら着ていらない四次元ポーット的な能力を持つている海パン一丁の、客観的視点から見れば百人中百人が変態と口をそろえて言うであろうおっさんが寝転がってテレビを観ていた。ときおり尻をポリポリと搔きながら……。

「ジャンヌ、嘘をつくんならもつと現実味がある嘘をつこうよ」

過去から手違いでタイムマシンに乗ってきた人に、現実味なんて言葉が通用するのか僕的には疑問だけだね。

「嘘ではありませんよッ。本当のことです」

「いやだつて……アレだよ？アレ」

台所のカウンターから居間の様子が見れるようになつてゐるんだけど、そこには、ときおり尻を搔きながら寝転がってテレビを観てゐる中年オヤジがいる。

これを見てあのおっさんがIQ500の天才的秀才的頭脳を持っているなんて、思えるわけがないよ。

「ま、まあ……。それは、たしかに……そう、ですが……」

それをつかれると反論できないみたいで、ジャンヌは僕から視線を逸らし、言葉を「一二〇」「一二〇」させる。

まあ、これ以上ジャンヌを困らせるのも悪趣味だと思い、夕食の準備の続きをしようとしたその矢先

「…ジムアーノーさん、元盗賊…」

そんなジャックマンの言葉が、僕の家に響き渡った。

第10話 間にまぎれて美術品とか盗むのが怪盗なのに、服が白基調なり皿立

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

ネット小説ランキングへ現代FTコミカル部門へ「ジャンク・ダルク」に投票です。

第1-1話 聞こまされて美術品とか盗むのが怪盗なのに、服が白基調なり皿立

「 怪盗にならぬよシーー。」

「 ゾヨ……ゾヨ……ゾヨ……ト、ビリビリモいい語尾が僕の頭でリフ
レインされる。」

「 ……ジャンヌ、のタマネギ取つて。皮剥くから」

「 あ、はい。わかりました」

「 聞かなかつたことにしよづ、つん。何事も厄介ごとにかかわらな
いべきだよ。山火事が起きてて、わざわざその火の海に飛び込む必
要はないしね。」

「 無視しないでトセレツ……ルミナ殿ツ……ジャンヌツ……」

「 わかりてますよ。遠慮なく無視をせいでいただきます、ジャックマ
ンさん。」

「 ……初号機に残された予備電源で、本部を破壊しますぞ」

初号機なんぞ」にもなつて。

ついでに言つと、零号機も一號機もなによ。

「 ……だいたいさ、ジャックマン。さつさまで『探偵になりたい
とか言つてなかつたつけ?』

「 ひょつひょつひょ……。余は気づいたのですぞ」

「 気づかないでほしかつたよ……。あとなに? その笑い方。せめて

「ふつふつふ……」元じゆつぱ。

「それで兄さん。氣づいたって、なにを？」

ああツー・ジャンヌッ……喰いつかないでよツ……今の君は既にかつた白鳥回然だよツ……で、僕もかな?もしかして……。ジャンヌの言葉に氣が乗ってきたのか、ジャックマンは雄弁に語り始めた。

「余は氣づいたのじゃツ……」

その台詞、わざわざも聞いたよ。あまり長くはできないんだから黙な行埋めは控えてよ。

もつとも、僕がこの言葉を声として出せば、無限ループとなるんだけど。無限とつくるものはスーパーマークの無限1UPテクニックだけで十分だよ。

「 惊盗 ツドまかつこことこ「ツド」ことツド……」

……。わざわざテレビで観ていたものはたしかコースでしたよね?コースを観て、なぜ怪盗ツドが出てくるわけ?

「だから余は、怪盗になるのじゃツ……」

かつこよさを求めるあまりに犯罪者になるつてわけ?この人は。犯罪したらかつこいいもクソもないつて、どうして氣がつかないんだろうね。

「何馬鹿なこと考へているんですかツ……犯罪をしたら本も子もありませんよツ……」

ジャンヌの意見に僕は心から同意。

「今ならまだ間に合ひつよ、ジャックマン。だいたいどうせひつて怪盗になつて美術品とか盗むつもつ？」

僕のそんな言葉に、

「心配無用ですか、ルミナ殿。そのために余は秘密兵器を用意しておつますのじや」

とか言つて海パンに両手を突つ込み、ゴソゴソとあそびはじめる。……下手に詳しく描写すると連載停止だね。変態道、ここに極み有り。

そして、例の場所から出してきたものとま

「通り抜け　ー　プウー　ー

捻りもへつたくれもないしッ！　口調もどりついづわけかドラ　もん口調ッ！　

「まずいって、ジャックマンッ！　もしそれを使つてしまつたら著作権的にまずいってッ！」

「ご安心ください、ルミナ殿ッ！　この小説そのものが著作権、ギリギリですからッ！」

なあやりまやこと思つるのは僕だけか！？

「それでは手始めに、隣に住んでいらっしゃる若奥様の下着を拝借しに行つてきますぞ。……ムフ　ー

「わたくし……アロ、いつお出です……なんちうて」

「ああッ！？人があッコミで忙しいときに何密かに犯罪実行しようとしてるのさッ！？やめろってッ！？マジでッ！？ここで僕が逮捕されて連載停止になっちゃったら読者の皆さんに申し訳がたたないじゃないかッ！？」

「大丈夫ですぞッ！この時代のこの国にはモザイクやピーチ音^{パイ}という伝統があるので、それでカモフラージュすれば、だいじょうぶですぞ！！」

夕食の準備をほつたらかして、変態おつせんにしがみつき、犯罪を阻止しようとする僕。

それでもおっさんの動きは止まる]]ではなく、]]のままでは]]おっさんが犯罪行為 隣にいる若奥様とやらに犯罪の一部始終を見られる ジャックマン逮捕 共犯の疑いをかけられ僕も逮捕（ジャヌは女性のためセーフ） 宅糞行き 連載打ち切り…… といつことになつてしまつツ！なんとしても止めなければツ！！

「むつふふう～ いざ行かんッ！ ネバーランドヘッ～！ ですぞ～
「だから止めてくれつてッ！ ！ 待つているのはネバーランドじゃな
くて牢獄行きの片道切符売り場しかないつてッ！ ！」

……くそッ！なぜー？なぜ僕がこんな目に会わなきやいけないの

セシー！誰か応援求むシ――！

と、そのとき、

ブショウ

そんな音が聞こえたかと思うと、ジャックマンの動きが突然止まつた。そしてそのままバッタリと倒れる。

さては、…………電池が切れた？

「そういえばジャックマンの裏設定に、オキシライド単4電池一本で動いている」というもんがあつたよつな…………

「ありませんよ。そんな裏設定

「やつぱり？」

そう言いながら後ろを振り返ると、そこには腕時計を片手に持つているジャンヌがいた。

「……その腕時計、なに？」

「これですか？」

……まさかとは思つたが、聞いてみると、

万が一にでも、その名前が口 ンのアレだつたら……僕は禁断の技を使つしかあるまい。

「この日かは忘れてしまいましたけど、これは兄さんからも「うつ

た時計型

」

ピ

.....

ピー音で、すべて解決だあッ！－（やけくそ氣味に言つのがコッ）

第1-1話 間にまぎれて美術品とか盗むのが怪盗なのに、服が白基調なり皿立

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

ネット小説ランキングへ現代FTコミカル部門へ「ジャンク・ダルク」に投票です。

第1-2話 片道切符は超不便です

ジャンヌたちがやってきて、なんだかんだで一ヶ月以上が経過して、僕もそろそろ一人の扱いに慣れてきたかなあ、と思つたりもしていい頃だと思つんだけど、どういうわけか慣れないんだよねえ、これが。

ちなみに今、僕は学校の下校中なんだけど、ジャンヌとジャックマンとは一緒に下校していない。なんかどこか寄るとこがあるようなんだけど……ジャックマンが。

そしてそのジャックマンが寄りたいといふて言つのが、「こんなのがあつたのか！？」と思つてこりだ。

店の名前は『THE ラブリー ふんじし屋』。通学路にある店なのに僕が今までツツコミを入れなかつたのが不思議だ。

僕もジャックマンが何かしでかしたらダメだと思つて店の一歩踏み入るところまではついて行つたんだけど、店長の姿を見たら三歩退いた。

裸エプロンにモジヤモジヤとめさせ千畳ツ！とばかりに伸びているアゴヒゲ。それにフンドシーツ、しかもやたらとハートマークがついた悪趣味の中の悪趣味を代表する格好だったからだ。

本来ならジャンヌと一緒に家に帰るべきなんだろうけど「兄さんの世話は私の務めですので」と言つてジャックマンに付き合つている。そんな務め、捨てればいいのにね。

「ただいまソス～」

特に意味もない意味不明な帰宅の挨拶を我が家の出入り口の扉を開けて言つ。返つてくる挨拶はないのが当然なんだけど、

「バブー」

。 。 。 。 。

。 。 。 。

バブー？

なんだろう？僕の耳に変なヴォイスが聞こえてきたような。しかもそのヴォイスがやたらと「おーッ！ 太郎ッ！」で有名な田 おやじチックだつたし。

おやるおやる今に行つてみると、セイにせ、

「バブー」

と赤ん坊がひとり。

…………はい？

なにこれ？どこからわいてきたの？

僕が突然のことには頭が真っ白になつていると、

「ただいまンバー♪プリントバー♪コードハゲはセットでお得～ですぞ
…………ついて、おうツ！？」

と、わけのわからない帰りの挨拶を言いながらジャックマンが居間にやつて来、そして赤ん坊を見るや否やパタリと止まる。まるで石化の魔法でもかけられたかのよつだ。

片手にはビニール袋があり、『THE ハワイー ふんどし屋』とプリントされているところから察するに、どうやらあの店で何かを買つてきたみたい。…………お金はどうしたんだろう？
そしてその後に続いて、

「ただいま帰りました、ルミナさん……………って、え？」

ヒジャンヌが居間にやつて来、そして赤ん坊を見てピタリと止まる。ジャックとおんなじ反応。

「違つち——」ルリナさんの子供?「

ジャンヌの質問に、僕は即否定した。いつたい何をどうしたらそんな勘違いができるのさ。

どわあツ！－赤ん坊が突然しゃべりだしたよツ！しかも目 おや
じヴォイスでツ！－ ていうか最初の含み笑いはなに！？入れる
意味ないんじやない！？

たけどどういわけか
チャンスをシャック[マンロー]の赤ん坊に
心当たりがあるらしく、

「あれか……ジャン殿ぞよか?」「
」
「その通りぢや、ジャックマン」「ンマ

「でもこ、『や』って何よ？ そんな語尾初

めて聞くよ。それにしても目 おやじチックなしゃべり方するなあ、この赤ん坊。僕はせめて、バカ ンのハ メちゃんみたいなしゃべり方をしてほしかったなあ。

「ジャン兄さんなんですか？ 本当！」

「フォツフォツフォ……。本当じや本当じや。我輩はジャン・ダル

クじやぞ、ジャンヌ！」

ジャン・ダルク？…………それってまさか…………。
するとジャンヌは、その赤ん坊を抱えて僕に、

「紹介します。私の兄であるジャン兄さんです」

やつぱりいいいいいいいいいい（なんで僕がジャン
について知っているかは第2話を見てください）

「ジャン殿、少し背が縮みましたかな？」

「本当です。たしか170センチはあつた気がしますが……」

おお いッシ……背が縮んだって、そつこつレベルじゃな
いだろッ、それってッ……明らかにジャンヌの兄を自稱するにはバ
ツと見の年齢がおかしいってッ……

「うむ。実はな、タイムマシンを使つていこまでやつってきたんじや
が、どうもその副作用らしきてのう。その副作用のせいで、いつも
つてしまつたんじや」

僕は部屋の隅つこに置かれている棺桶型タイムマシンへと視線を
移動させると、蓋が開いていた。どうやらこの赤ん坊……否、ジャ
ンの言つてこいることは本当りじよ。

「それにしておジャン兄さん。どうしておこなってきたのですか？」

と、もつともな質問をジャンヌはジャンにした。僕も確かに知りたい。そしてできることなら即刻帰つてしまい。これ以上僕の平穏を乱さないでほしいからね。

するとジャンは「うん」と答えた。

「気分じや」

「気分ね。なるほどなるほど。

…………おせんな、田 むやじ。

「それじゃ、悪いんですけど即刻帰つてくれませんか、ジャンさん」「あ、それ無理じや」

「なんで？」

「じゅつてあのタイムマシン。向こうからひいてしかこれなによくなつてゐるおじやからね。のつづきジャンさんよ」

…………あんだつて？

僕は視線でジャックマンに問いつ。

「…………おじや、ルミナ殿。だから余たちもずっとおこなつたよ」

ジャックマンのしゃべり方が微妙におかしいのせりの際田をつぶる。「

…………なるほど、確かに。こまさらながら納得だ。…………

か、そんな不完全なものを使つなよッ――

「…………おじや、よろしく頼むぞ。…………えへつと………… 太郎

.....ツツ「ミミを入れる気も起きなかつた。

第1-3話 それでは、主人公のオーラの色や前世や守護霊が何か、見てみましょ

【おひらの泉】

「みんなの『おひら』や前世、守護霊なんかを調べて、人生アドバイスをする『おひらの泉』。司会はおなじみ、ジャン・ダルクじや」

…………。

「せひさて、今回のゲストは、遠藤ルミナさんじや。なんじやかとてもやつれでいるように見えますが、大丈夫ですか？」

…………そういう問題か？

「…………ていうか何、これ？」

「【おひらの泉】じや」

「いや、それはわかつてゐるつて。あからさまにアレをもじつてゐるだけのタイトルだし。具体的に何をするのか聞いているんだけど……」

「我輩がおぬしの人生相談に乗つてやるつゝていうものじや」

赤ん坊に人生相談する気はないんですけど。

「赤ん坊ではないッ！我輩はジャン・ダルクッ・ジャンヌたちの兄じや」

偏った食生活でろくに運動もしないから身体が成長しなくなつたんだな、この日 むやじは。

「違う。タイムマシンの副作用でこうなつてしまつたんじや。

ちなみにジャックマンのあの変体振りもタイムマシンの副作用によるものじゃ」

嘘つくなッ！ジャックマンのアレは明らかに地だろッ！ つい
うか肉親である人から見ても、ジャックマンは変態なんだな……。

「ああ、そうそう。ちなみに我輩は田 おやじの親友じじゃ
「へえ～」

嘘八百壯くなよ、ヒセ田 おやじ。

「……用がないなら僕はこれで帰らせてもらつていいかな？…… て
いうかここが我が家なんだけど、僕が学校に通つてる間に何してく
れた？」

「今回のこの企画を立ち上げるために模様替えしたんじゃ」

……そう。ここが我が家、のはずなのだが、どうこうわけか模様
替えされていた。

家主である僕に断り入れずに、だ。

部屋のカーテンはすべて真つ黒のものに変えられ、居間には四つ
の椅子が用意されていて、向かつて左から僕、ジャンヌ、ジャック
マン、ジャンの順に座つていうという感じだ。

……まんまアレジyan！

「ちなみに我が弟と妹も手伝ってくれたぞ」

僕より一足早いうちに帰宅した理由はこれだつたのか……。ジャ
ンヌは強引にジャックマンに連れ去られてたみたいだけど。

ちなみにジャックマンは今か今かと童心に返つたように……いや、
もとから童心に戻つてばかりの気もするのだが、ともかくそんな

感じにわくわくしておひ、ジャンヌはとこつと申し訳なさそうに眉尻下げながら「すいません」と、僕と田が合つたびに頭を小さく下げる。どうやらジャンヌひとりではバカ一人を抑制させることが出来なかつたようだ。

本当に苦労人だね、ジャンヌは。

「それでは、ジャン殿。早速始めましょうぞ。いい加減読者の皆さんが『話の本筋に入れ』とシシコモを入れて来る気がするぞよ」

僕もそのシシコモをしたかつたんだけど。

「フムフム……。それでは本格的に始めようかのう。 それではルミナ君、【おうらの泉】によつてそじや

「はあ……、どうもです」

……仕方ない。ここは手つ取り早く終わらせてから、部屋を元通りにするとしますか。ジャンヌも手伝ってくれるだらうしね。バ力二人はしないだらうけど。

「それではルミナ君よ。失礼ながら『おうら』の色を拝見させちらいますぞ」

「はあ、いいですけど」

「どうでもいいけど『おうら』って？」

『オーラ』じゃないんかい、てシシコモは無しなのかな？

ジャックマンは目をキラキラと輝かせている。

まるで少女マンガのヒロインのよう……。 おっさんがやつても変人にしか見えないからやめなさい。

ジャンヌは先ほど申し訳なさそうにしていたけど、いざ始まる好奇心の田で僕とジャンを見ている。……別に、いいんだけどね。

「むむツ！見えるツ、見えるぞ～……」

「それで、色は？」

「白じやな」

「へえ～。白つて言つたらけつこう良い感じじゃないの？」の人が
ことだから99パーセントの確立で外れているだろうけど。

「ルミナ君のパンツのいろは ゲフウツ！…」

…………あ あ 。すいません。

「ここから先はグロテスク描写が続くので十五歳以上の人は閲覧し
ないで下さいね

「ちょっとルミナ殿ツ！幼児虐待ですぞツ！…？」

「フツフツフ～ 僕の愛包丁が血を吸いだがつてゐるのさツ」

「ルミナさんツ！落ち着いてくださいツ！…気持ちはわかりますけ
ど深呼吸を数回して落ち着いてくださいツ！…」

「まるで初号機の拘束具が覚醒と同時に外されたみたいですぞツ！
！」

しばらくお待ちください

「 では次は、前世を見るとしますかのう」

何事もなかつたかのように進めるジャン。僕も元の席に着席して
るから人のこと言えないんだけどね。

「…………あなたの前世…………あなたは前世、掃除をよくしてます
のう」

…………そななの?

ビニの会社の清掃員とか?

「動きが速いですのう」

動きが速い!?

全くわからないんですけどーー

高速で箒で床を掃く清掃員とか?

「…………むむッ!なんと、子供がいるのじやーー」

子供?結婚してたのかなあ?

「三十九歳

三十一…?ひょっと待つてッ…あからさまにおかしくない?その
数字!

「しかも真っ黒じゃッ!」

真っ黒!?

ん?なんだろ?何かを連想させるような…………。

掃除好き。

動き速い。

子供たくさん。

真つ黒。

○

「」「」「」「」「」「」「」「」

「いい加減にしろよ貴様ああああああああああああああああああ

! ! ! !

ボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコ

「 ちよつとルミナ殿ツ 一一一〇 ハンボはやり過ぎですかツ 一一一 しか
もまだ記憶更新中! ? 」

「まるでメールの無限「ンボをリアルでやつてゐみたいですか?」

しばりへお待ちください

「さて、最後は守護霊じゃ。おぬしの守護霊がどんなものなのか、我輩が教えて進ぜますじや」

何事もなかつたかのように再開する【おうらの泉】。……僕も人のこと言えないんだけどね。

「守護靈……………。パパ ヤ鈴木の守護靈はパパイヤ……」

「いやいやーーそれ今関係ないでしょーーー。
しかもやうじやないしつーーー！」

「……………守護靈、守護靈……………むむシー來たッーーー！」

「……………なこつ？」

特に期待もせずに僕は訊く。

「血當業を嘗んでゐるのじゅ

早くもつも臭い。現在形だし。

「何かの専門店じゅ

へえ。

「アゴヒゲボーボーじゅ

……脳内検索中。

「ハートマークのついたフンドシをしてますじゅ

……あ、検索に一軒だけ該当があつた。

「最近我輩の弟がそこで何かを購入してゐるのじゅ

僕は席を立つ。そして拳を構える。

「おぬしの守護霊は『THE フラワー ふんじし屋』のトトロ
ゲフフオオッ！…！」

「『テタラメ』にも『モジ』があるわああああああああああ
！…！」

ボロボロボロボロボロボロボロボロボロボロボロボ
ロ……

「ルミナ殿ッ！…！」『ボは酷過だぞッ…！…しかもまだ記憶
更新中…？』

「『おばあちゃんおばあちゃん、どうしてそんなに手が真っ赤なの
？』、『それはねえ、リン』『』を握り潰したからだよ』『なんだ、そ
うだったのかあ』」

「ルミナさんッ！…何さつ気に赤 巾の一節を改変してるんですか
ツ…しかもまた性格変わつてますよッ…！」

「まるで秋 雨のとき拳の疾さですゼッ…！」

じばば、まへじだひく

「それでは人生アドバイスをしようかの？」「
いらっしゃー！」

第14話 チキチキ、奇妙奇天烈な話選手権

えへ、こんにちは。

いや、こんばんは、かな？投稿した時刻が夜だし。……まあいいや、そんな細かいことは。

どうも、遠藤ルミナです。夏休みに入りました。
え？ 時間設定が無茶苦茶だつて？

大丈夫だよ。もとから無茶苦茶だから、この小説は、
ちなみに最近白髪が出てきて大変です。それだけ苦労しているつ
てことだらうね。

そして今回、また僕の頭の白髪の本数を増やすような出来事を、
ジャックマン＆ジャンのバカコンビが運んできたわけさ。
では、御覧いただこうかな。

わつそくが一本、火をチロチロと燃やしており、そのわつそくを
円で囲んでいる僕とダルクの愉快な家族たち。……それとプラスひ
とり。

「いやへ、怪談話すんのも久しぶりだな、ルミナ」

と僕に話しかけてくるのは僕の腐れ縁の親友で今回のプラスひとりこと、後藤哲哉。通称工口哲。

軽い性格でナンパの常習犯の上、頭は酔っ払ったナマケモノ以下
だろうと推定されるほど壊滅的に悪い。欠点の水平線を低空で飛行
しており、ときどき落ちる。

そんななのに、いやとなると約束事を守つたり、親友を見捨てないという義理堅い一面もあつたりするのだけど……。

「いやー、ジャンヌさん。今宵も貴方は美しいですね～」

うーん、その良さが黒板の書かれたいだずら書きのよつにあつさりと消されるねえ。

とりあえず僕はエロ哲の後頭部をチヨップすることにした。ちなみにエロ哲、ジャンヌが僕のところで居候しているのにかなり驚いていたな。「一人屋根の下でストロベリィな展開を楽しんでいるのかあ！」とほざいたので、僕はとりあえずグーパンチを頬に喰らわせたけど。

だいたい一人じゃないし。四人だし。

しかしエロ哲の目には最初、むつさい変態おやじことジャックマンと、幼児退化レベルどこのではない見た目は赤ちゃん、頭脳はおっさんことジャンが映つていなかつたよつだ。

そこでエロ哲を納得させるよつな適当な言い訳を僕が完全アドリブで言つて、どうにか落ち着かせたわけ。

「……それでジャックマンに『ジャン。ひとつ話きたい』ことがあるんだけど」

「なんじや？」

「なにぞよ？」

「なんでもまた……怪談話、もとい『世にも奇妙奇天烈な話』をしようと考えたわけ？エロ哲まで巻き込んでぞ」

「ん~つと……それはじやな……」

「それはぞよな……」

「ちなみに『暇だったから』という理由以外で答えて」

「……」

「……」

おい！明後日の方に向に視線を逸らすなッ！－
ていうか図星だつたんかいッ－！

「……常に刺激があつたほうがいいと思つたからじゃ

つまりは『暇だつたから』って言つてると同義じゃないのか？
それつて。

「さて、そろそろ始めようではないか、ルミナ殿」

ジャックマン、話逸らすなつて。

まあいいや。テキトーに話進めて、それで終わればね。……まん
ま前回と同じこと考へてるよ、僕は。

ちなみに僕はそんな話をする気はない。みんなにもあらかじめ予
告をしたし、聞くだけさ。ちなみにジャンヌもこの手の話は出来な
いらしく、僕と同様聞くだけである。

よつて必然的に、工口哲、ジャックマン、ジヤンの三人だけが『
世にも奇妙奇天烈な話』をすることになる。たいていこうこう話つ
て怖い話や怪談話になるんだよねえ。

「よつしーじや、俺からいかせてもらひつか」

一番手に名乗りを上げた工口哲は、雄弁に語り始めた。

これは俺が小学五年だつた頃だ。

たしか……五円だ』る、だつたな。学校の行事で『自然学校』での
があつてな、山にある合宿所……まあ寮だな、に行って一週間そこ
で泊まつて自然を満喫するつて行事なんだ。まあ、ルミナのやつは
覚えてるよな？

（ああ、覚えてるなあ。確かにそんな行事があつたつけ）

その寮の外にはプールがあつたんだけど、そのプールで昔溺れた
生徒がいたらしくてよ、それ以来真夜中になるとその生徒の幽霊が
現われてプールで水浴びしているつていう怪談話があつてよ。

（定番だね）

それを俺が本当かどうか確かめに行つたわけよ。ひとりでな。
そしてプールを張り込んで0時になつたくらいに、突然、更
衣室から何かが出てきてよ。

初め、姿は真っ暗でよく見えなくてな、誰だ誰だと思つてこるうつ
ちにそいつはプールに入り込んで水浴びをし始めたんだ。
これは間違いなく溺れた生徒だ！ と俺がそう思つた矢先に、
その幽霊と思われるやつが、こう言つたんだ。

「 ああ～、良い湯だなあ～ 」

と。

（……）

「よく見たらよ、そいつは学校の教頭先生だつたんだよ！まつたく笑つちまつとなあ！…」

僕はそんな話をしたやつの首筋をチョップし、一時的に脳に血が行き届かないようにして氣絶させた。

「ちよッ！ ルミナさんッ！ 何してるんですかー？」
「退場」

H口哲を円から外し、部屋の端っこにアンティークドールのよう にぐつたりと座らせた。
だいたい「良い湯だな」て、五円のプールだぞ？ なんでやねん、 とその教頭にツッコミをしたい。

「それでは、次は余が話をしようではないかぞよ。どうぞきりの感 るしい話を」

そしてジャックマンは語り始める。ていうかやつぱり怪談話かー！？

あれは、寝付きにくい夏の夜のことだぞよ。
真夜中にちよつと用をしに、トイレに行こうとしたんだぞよ。
なんじゃかそのとせ、どうこうわけかいつもと少し違うような違 和感を感じたんだぞよ。

そのことに少し恐怖を抱きつつも、余はトイレにたどり着いて、

用をしようとしたとか、余は驚愕した！

（…………トライに何かいたとか、そういう感じの怪談話か？これ
は。赤紙青紙とか、そんな感じの）

なんと、余は……余は……

フンドシをしてこなかつたんだぞよ。

（…………）

「どひつであるとき、下半身に違和感があつたわけぞよ。フンドシ
をしていなかつたから、やたらとスースーしてヘブフウツ……」
「ちよツ！ ルミナセんツーまた何してるんですかツ……」

「退場」

氣絶かせた変態おやじを棺桶の上で寝かせる僕。

…………ていうか、もつとマシな話はないのか？ そのままではまたいつものバカなノリで終わつてしまつよ。

残る話し手は赤ん坊……じゃなかつた、ジャンだけ。今までのこいつの行動上、前者一名と同じ末路を辿る可能性が高い。今の内に手首のスナップをきかせておかないとね。

「どひやら残るは我輩だけのよひじゃの？
「やのよつだね、ジャン」

……考えてみたら、いつの間にか僕はジャンに敬語を使わなくなつてゐるなあ。……まあいいや。本人も気にしていないようだし、田頃の行いが年上とは思えないものばかりだからね。

「ふつふつふ……。我輩の話は怖いぞ？なにせ昔、お笑い大会で準優勝に輝いたくらいなんじやからな」

早くも不安が倍増する。お笑い大会？今は怖い話をする場だぞ？前者二名と同じ末路を辿る気満々だよ、この人は。しかも『世にも奇妙奇天烈な話』じゃなかつたんかい！

「ま、黙つて聞くが良い。面白さのあまりちびつてしまふかも知れんがのう」

面白さのあまり！？

……ああ、もうダメだ。おバカロードまつしぐらだよ。

僕が手首のスナップを聞かせる練習をしていくにもかかわらず、ジャンは語り始めた。

XXXX年、全人類は「なかれ教」と呼ばれる宗教に属していた。

（ジャン視点じゃないんだな……）

なかれ教とはどういうものなのか、それは文字通りに思つてもらえれば結構だ。

その宗教に入った者は、規律にちゃんと従わなければならぬ。

汝、他人を殺すことなれ。

汝、他人に迷惑かけることなれ。

汝、悪事をすることなれ。

汝、他人を騙すことなれ。

汝、他人を裏切ることなれ。

・・・・・

汝、食べ物を食べることなれ。

汝、寝ることなれ。

汝、歩くことなれ。

汝、走ることなれ。

汝、動くことなれ。

汝、息することなれ。

汝、心臓を動かすことなれ。

汝、生きることなれ。

規律を守るため、全人類は自殺し、世界には誰もいなくなつた。
しかし、この規律はまだ続いている。

汝、死ぬことなれ。

否定に否定を重ねると矛盾が生じてくる。
それが、「なかれ教」。

「
.....
」

.....まあ、確かに奇妙奇天烈な話だつたな。
つて、この様子じやオチ無しか？今回。

第15話 空を飛ぶ感じって、どんなだらつか

はじめに、前回のジャックマンは、あれからどうなったのかとい
うと

返事をしない。ただの屍のようだ……

そんなテロップが流れてもおかしくはないだらうとは思つてはいたのだが、どういうわけかジャックマンは前回の火あぶりの刑での火傷はしなかつたのか、まったくの無傷だつた。

それどころか性格も変わっていない。どうやらあのステッキは、ただの殺戮兵器だつたようである。……いや、兵器を『ただの』といふのは少しおかしいかも知れないけどね。

ともかく結論をいうなれば、あの謎ステッキはあの後ドラーモンの四次元ポケット並の能力を持つてはいる海パンの中に収納された。

……収納つて、この場合おかしくないかな？

さて、それはともかくとして、今回の話へとそろそろ入ろうかな。

それは、僕が学校から自宅へと帰つたときのことだった。

「ただいま〜」

といいながら僕は我が家へと入り、そして今へと顔をひょいと覗かせると、そこには……

「ふあつふああ ツ！…仮面ラ ダー・キイイイ クウツ…！」

とか言いながら居間でひとりで暴れ、戦隊ごっこをしている見た目は三十路のおっさん、頭脳は幼稚園児のジャックマンがいた。そしてそのおっさんの頭には何かしらの物体が乗つっていた。

「あ、ルミナさん…」

名前を呼ばれて僕はおっさんからその声の主であるジャンヌへと振り向かせた。ジャンヌはどうやら先ほどから目の前のおっさんのひとり芝居を延々と見ていたみたい。…止めるの？

「いえ、一度止めたのですけど……『これから時代、宇宙人の時代であるぞよツ…』て言つて……その…」

聞かなかつたと。

ていうか、仮面ラ ダーって宇宙人だったっけ？確かに昆虫だった氣もするけど……まあいいや。昆虫が人間化している時点で宇宙人と大差変わらないからね。

「おおツ…ルミナ殿ツ…帰つていたのですか！？」

よつやく知能レベル幼稚園児のおっさんが、僕の存在に気づいた
ようである。

……ていうか、僕はまず訊きたいことがある。

「……ジャックマン。頭に乗っているそれはなに？」

頭に乗っているもの……それは僕の目がおかしくなつていなければまぎれもなくズラだつた。それもハゲヅラ。

そのハゲヅラには哀愁漂う波形の髪の毛が一本あり、「ああ、なるほど。髪の形が波だからサヒさんのあのおっさんの名前は波平なのか」となんとなく思った。まったく今は関係ないけどね。

「なにして、ズラですぞ。……何ですか？最近の若者はズラヘルムも知らないのですかな？」

いやいや。ズラのことは知つてたけど。

「そんなことより、何でそんなものを被つてるの？」

地毛じゃないんだし。さては自分のおっさんキャラをさらりに全開にじようとう心構え？

「そんなことありませんぞ。……フフフ、いいですか？ルミナ殿。これは一見、何の変哲もないただのハゲヅラに見えますね？」

そうとしか思えないよ。百人が百人そう言つだらうね。

ていうか、いつの間にかジャンヌの姿がないのですが……さては逃げた？これから面倒ごとに巻き込まれると思つて地震を予測したネズミのように逃げましたか？ジャンヌさん。

そりや、僕だって「嗚呼、これは絶対に面倒になるな」と

は思つてゐるけど、主人公である僕がここから逃げ出したら話の筋がまったく通らないようになるから逃げていないので、ヒロイン的存在である君が逃げ出してもいいの？

……そういえば前回、ジャンヌの出番がなかつたなあ……。

「ああ、うん。見えるよ見える」

とりあえず話を進めようと僕は投げやり氣味にそう言つた。
するとジャックマンは「フツフツフツフツフウ～」と笑い出し始める。……なに？ その笑い？

「実はですね、このハゲヅラ、またの名を勇者のシンボルはただのハゲヅラではないのですぞ！」

そうと思つてゐるつて。どうせ四次元ポットの働きをしているその常時二十四時間穿いている海パンの中から取り出して、それでさつきまで遊んでいたんでしょうが。

まあ、どんな効果を持つているのかは知らないけどさ。

それとなに？ その勇者のシンボルって……。

ハゲヅラが勇者のシンボルだつたら勇者の人気がた落ちだよ、絶対。ていうか勇者がかわいそうだね。

「実のこのハゲヅラの正式名称は『ハゲコフター』という、空を飛べるアイテムなのですぞッ！！」

「へえ

20へえ中1へえ。百円差し上げましょう。

でも前々回勝手に僕のお金使つてバクチして稼いだ分から学校に入学してきたからその分でチャラね。

「さあ、ルミナ殿ツ！このヅラを被つて大空の旅にでませんか？」
「いや、いい」

恥ずかしすぎるからね。

「そう言わずにツ！ほらツ！」の髪の毛一本が高速回転して空を飛べるようになつてゐるのですぞツ！」

……それを聞いて決心したよ。絶対に被つて使わない、とね。

「今なら使い終わつたボロ雑巾ぞうきんとかたつぽがなくなつた割り箸をつけて、お値段なんと十万円ですぞツ！一週間レンタルでは二十万円ツ！」

……よしツ！決めたツ！絶対に絶対の絶対であるくらいに被つて使わない、とね。

それと、購入したほうが安いといふのはどういふわけなんだろうね？

……はツ！まさかこのタケ プターならぬ『ハゲコプター』が四元ポケットよろしく海パンの中にまだ大量にあつて、在庫処分するためレンタル料金を販売価格より吊り上げてゐるのか！？

「さあツ！買ひなされ、ルミナ殿ツ！つーか買えツ！！卸値が五十万円もしたのですから十万円は安いとは思いませんかな？」

売つてゐる意味ね

！！

損してゐるだけジャンツ！！

てことはやつぱり在庫の処分に困つて販売価格をレンタル料金より下げてゐるのか！？

……ていうか四次元つて、いくら物を入れてもパンクすることは

ないんじゅ……？ そういうのはツツ 「まないほうがいいのかな？」

「悪いけど……そんなお金ないからバスね」

だが実際のところそのとおりなので、仕方がない。

一人暮らしでバイトもせずに親からの仕送りだけでどうにか学生としての生活をしている僕にとって十万円は破格である。

イヤやアフレ テ3がほしいと思つて『に、その高さのあまりに買えていないわけだしね。

「…………！」

僕が断るヒジャックマンは「ガガガガガ…………ンー！」といつた感じに口を開けて、呆然とする。

「………とか、もともと買つ気もなかつたわけだし、ここまで展開は予測済みなので特に気にしない。」
するとヒジャックマンは、

「……………ですか。仕方ありませんね。ルミナ殿の財布の中身が海王星よりも寒いことは知つてるので、どうせ無理だとは思つていたのですが…………まあ、物語の進行上、訊くしかないと思つたわけですよ……………チツ」

「え！？ なんですか！？」「チツ」て！？

僕が少々戸惑つて『に、

「いえいえ、気になさらずに。実はダ ソーで買つてきた』く平凡なハゲヅラをルミナ殿に十万円で売りつけよつなんてことは、別に考えてなかつたので、気にする』ことではないですぞ」

あ、
やめないと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2289b/>

ジャンク・ダルク

2010年10月10日07時08分発行